

バイ漁場における貝類の複合生産技術（抄録）

由木雄一・石田健次・日野裕介

イタヤガイの効率的採苗器の開発を目的として、これまで各種の採苗器を試作し、調査検討（構造、付着材、目合、設置方法、場所、時期等）を行ってきた。これらの結果をもとに、今年度は浮遊幼生が高密度に分布している沖合域での大量採苗を試みた。沿岸域では、従来通り垂下式採苗方法により試験採苗を行い、毎月（1～6月）採苗器の一部を回収し、各月の稚貝の付着状況を調べた。また、それぞれの試験採苗器の比較も行った。さらに、採苗施設周辺海域において、ノルパックネット鉛直曳により浮遊幼生の分布状況を調査した。得られた稚貝は追跡調査（生残・分散・害敵等）のため放流に供した。

バイに関しては、イタヤガイの天然採苗を行っている恵曇沿岸域において、カゴ調査を実施し、バイの分布を確認した。また、その周辺海域に産卵基質としてブロックを沈設し、産卵期前後に潜水観察を行い、バイの天然採苗の可能性について検討した。

詳細は「昭和61年度マリンランディング計画プログレスレポート」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

結 果 の 概 要

イ タ ヤ ガ イ

1. 浮遊幼生

浮遊幼生の出現盛期は、ほぼ例年と同時期の1、2月であったが、出現期間はやや短かく、出現量（0～0.5個/m²）も少なかった。

2. 稚貝の付着時期

稚貝の付着期間は例年と同様1～4月頃で、その盛期は2、3月であったと思われる。また、例年に比べ付着期間は短く、付着盛期における付着量も特に少なかった。

3. 採 苗

垂下式採苗施設の採苗袋の回収率は約7割（172袋）であった。稚貝の平均付着数は46個と非常に少なく、昨年¹の1/5以下であった。一方、底層式採苗施設は4基（使用採苗袋4,700袋）を設置したが、回収できた採苗袋は2,593袋であった。稚貝平均付着数は92.6個と垂下式の約2倍であったが、昨年¹の1/3と少ないものであった。

4. 放 流

天然採苗で得られた稚貝はフルイで選別し、殻長20～60mmのものを加賀湾（水深10m）に約15万個放流した。

5. 試験採苗器

底層式採苗器と垂下式採苗を比較した場合、底層式の方が約2倍の採苗数となったが、これは施設の設置場所の条件（浮遊幼生の分布密度、波浪の影響等）の差が大きく影響しているものと思われる。新しい付着材として用いた大きな目合（25mm）のブルーネットの採苗数は、古網や、これまでのブルーネットと大差ない結果であった。

バ イ

1. カゴ調査

バイカゴで漁獲された約7割のものが産卵に加入すると考えられる6cm以上の大型の個体であった。逆に5cm未満の小さな個体は全く漁獲されなかった。

2. 産卵基質

産卵基質として沈設したブロックへのバイによる産卵は確認されなかった。これは、ブロックの沈設場所（産卵場がもっと浅い所という可能性もある）、また、産卵基質としてのブロック自体に問題があるのか、あるいはこの海域に生息しているバイの絶対数が少ない等考えられるが、いずれにしても今後の調査に待たなければならない部分が多い。